さまよう霧の恋歌（下）

高橋 治

新潮社

高橋 治

さまよう霊柩車（下）

苏工学院图书馆
藏书章

新潮社

〔著者略歴〕

一九二九（昭和四）年、千葉市に生まれる。金沢の第四高等学校を経て東京大学文学部国文学科を卒業。松竹に入社し、一九六〇年より監督作品を発表、並行して戯曲も執筆する。一九六五年松竹を退社、本格的な作家活動に入る。一九八四年、「秘伝」で第九〇回直木賞を、一九八八年、『別れてのちの恋歌』（新潮社）『名もなき道を』（講談社）で第一回柴田錬三郎賞を受賞。主な著書に『派兵』『くさぐさの花』（朝日新聞社）、『絢爛たる影絵』『自白の構図』（文藝春秋）、『秘伝』『流域』（講談社）、『風の盆恋歌』『花ものがたり』（新潮社）などがある。

さまよう霧の恋歌（下）

一九九一年五月二五日発行
一九九一年九月二五日四刷

著　者　高橋　治
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―三二六六―五一一一
（編集部）03―三二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八
印刷　二光印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
価格はカバーに表示してあります。

© Osamu Takahashi, 1991
Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-356906-9　C0093

目次

第六章　桔梗綻ぶ……5
第七章　琵琶歌う……74
第八章　逃げ水を追う……125
第九章　斜光に浮かぶ……166
第十章　月澄み返る……242

装画　風間　完

題字　坂野　雄一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さまよう霧の恋歌（下）

第六章　桔梗綻ぶ

翌日、昼食のために仕事場を出る時に、柱に打った掛花の花が枯れていることに武部は気づいた。この日頃、桐子のことで慌しい毎日を過していた。そのため、つい見逃していたのだった。

花と刀を研ぐことの間にはなんの直接的な関係もない。だが、心の備えとかゆとりとかで、欠けるところが出て来るように思える。早苗がいなくなってからは、なおのことそれが気になり出した。

全く気づかぬ中に、家じゅうの花が新しくなっているのは良いものである。一種の清々しさが胸の中にみたされる。武部もそうだが、早苗も花を量や種類の多さで見せることは好まなかった。殊に、花器には殆ど眼配りがきかない人間が、いかにも活けましたぞという形の花を家の中に置くのは、他人事（ひとごと）であってもたまらない気がする。花器に花を合わす。あるいは家の中に持ちこみたい花をひきたててくれる花器を選ぶ。そうしてやってこそ、初めて花が生かされる。

そろそろ、自分の山から移して来た三つ葉つつじが咲く頃だと思い、昼食後に鋏（はさみ）を持って庭に出た。門の内側の右に、生垣を眼かくしにした畑がある。その奥の隣家との境いに、濃い紫の花が一輪揺れていた。澄みきった紫だけに、一輪でも目立つ。三つ葉つつじの花色には個体差があるのだが、この花はとり分け濃い紫に咲く。

木に近づいてみると、枝の先にすっと立った花芽が、いっせいに焦茶色の衣を脱ぎ捨て始めていた。

冬の間は枝のかぼそさばかりが際立つ木なのだが、花が次々に開き、庭の一隅に紫色の雲がかかっているかと思える咲き方をする。そして、花が終ると、それを待っていたように、潔癖に三枚ずつの葉が、やはり衣を脱ぎ捨てて枝の先に立つ。若緑色のその葉色が、また、この木の限りない魅力でもある。ただ、枝が繊細に出来ている割に、三輪の花が三方に向いて咲く花冠が大きい。切り方によっては、バランスが崩れて花器におさまってくれない。大ぶりで口がすっと立ち上った李朝白磁ときめて、武部はどこで切るかを考えた。

車が門の方に入って来る音がした。それが停った。武部は振り向いて、門の方を見た。例によってきちんとした背広姿の寿三だった。寿三は一人の男を伴っていた。武部は寿三がなにか急な用事が出来て訪ねて来たに違いないと思った。

「ちょっと、お待ち下さい」

武部は寿三に声をかけ、ひと枝手近かな三つ葉つつじを切り、畑の隅に植えてあるぐみの枝に鋏を入れた。

座敷の床の間には、旅枕という名で名高い形の、伊賀の筒状の壺が出してある。客が玄関に上る間に、庭に面した廊下から廻って、その枝を投げこんでおけば、一応の様にはなる。熟したぐみと、青いままのぐみの色の対照も面白い。楽屋を見られてしまったようなものだが、寿三ならさしつかえあるまいと武部は考えた。ぐみとつつじを片手に持ち、武部は寿三たちが待っている門のところに戻りかけた。三十代の後半だろうか、あるいは、ひょっとしたら四十歳になっているのか、寿三の伴った男は年齢がつかみにくかった。

ひとつには恰幅が良く、肉づきも良いせいもある。若い時分には、素人相撲で大関の地位にあっ

たという寿三と並んでも、少しも見劣りがしない。チャコール・グレイのヘリンボーンの上下に、ごく淡いピンクのワイシャツを着て、銀色に寄ったブルーの縞のネクタイを結んでいた。総てがかなりな高級品らしく、服装には常に気をつかっている寿三も及ばない。

これは一体なに者なのか。武部は歩み寄りながら男の素性を考えてみた。

「どうぞ、お入りになって下さい。思いもかけないところをお見せしてしまって」

武部は一方的な挨拶だけして、玄関に戻り、格子戸をあけた。

「どうぞ」

そこから振り向いて、二人に声をかけた。寿三がうなずいて、先に行けというように、客をうながした。客は丁寧に会釈を返し、いく分、振り返り気味に踏石を伝い始めた。二人の態度が改ったものでありすぎる。

〝あるいは……〟

そんな思いがちらと頭の隅に浮いた。だが、寿三の前夜の話では、桐子の身内であるといった人間は、女でしかもかなりな年齢だということだった。この男であるはずがない。

手早く花をとり替えて、武部は玄関に出た。思った通り、二人は靴も脱がずに立っていた。

「どうぞ、御遠慮なく。とり散らかしていますが」

武部はすすめて、二人を座敷に通した。正座した客の膝がもり上るほどにたくましい。大学の頃に、なにか烈しいスポーツでもやった体に見えた。

「あ、こちらは」

寿三が紹介しようとした。

「岩渕です」

男は寿三の言葉尻に重ねるように名乗った。そして、内ポケットから出した革の名刺入れから、

一枚の名刺を引きぬき、座ったままの体を一杯にのばして、武部の前に置いた。
「武部でございます」
答えたが、名刺は書斎と居間にしか置いてない。とりに立とうと思った時に、岩渕の次の言葉が続いた。
「今回のことでは、家内がいろいろとお世話になりまして」
両膝についた腕の上で高く上っている肩の間に、岩渕は頭を下げた。
「は？……いえ」
武部の答えは、心ならずも曖昧なものになった。
「名刺を持って参ります、失礼します」
その場を取り繕って、座敷を滑り出た。そして、仕事場の手前の書斎に入り、手にして来た名刺に視線を落した。岩渕商事株式会社の社長で代表取締役という肩書になっている。だが、名刺からは他のことはうかがえなかった。武部の頭の中で、様々のことがかけめぐった。自分で名乗る以上桐子の夫に間違いはない。
見上げた視線の先で掛け花の花が枯れていた。武部はそんな偶然にこだわる型の人間ではない。だが、今しがた、花のことに気づいて、その花を切りに出たところだけに、寿三に連れられて来た男が、桐子の夫だという事実は、心理的にかなり重圧感を伴うものだった。いい現わしようのない気持のすることである。消化出来ないものが胃の内部にどっかと腰を下してしまっているようにも思える。
桐子との間にはなにがあったわけでもない。確かにあるものは、桐子が武部を頼りきっているという事実だけである。しかし、それは、男と女である前に、人間として信頼出来るのか出来ないのかという、きわめて基本的な次元のことに思える。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あるいは、時間をかければ、女としての気持のありようも、男としての心のあり方も愛に変って行くこともあるだろう。いや、もうその領域に入って来ているのかも知れない。だが、現実としては、夫だと名乗った岩渕の視線を恐れなければならないようなことを、武部は全く持っていない。むしろ、心理的にひけ目を感じなければならないのは、岩渕の方だろう。

時間にすれば、せいぜい一分にもみたない長さだっただろう。武部の頭の中を色々なものが駈け違った。それらのことはそれらとして、武部は一札の名刺をとり上げた。そして、書斎を出ようとした。だが、いったんとって返し、枯れた花を屑籠に捨てた。

お腰のものお預り処、と書かれた武部の名刺を、岩渕はしげしげと見た。

「……これは珍しいお仕事で」

初対面のどんな人間に会った時でも、武部の名刺は話題を特殊な仕事の方に引きずって行ってしまう。

〝お腰のものの話は、そこで止めにしておきましょう〟

武部は無言の応対にそんなものを見せた。岩渕はそれを鋭敏に感じたらしかった。

「この度のことでは、家内がなんの御縁もない方に……」

岩渕はまた深々と頭を下げた。

「いえ」

答えながら、武部は一瞬妙なことを考えた。桐子の写真を見たわけでもない、桐子自身に会ったわけでもないのに、岩渕は自分の妻だと決めてかかっている。岩渕はすかさずつけ加えた。

「その、御厄介になった者が、家内に間違いないとわかったわけではございませんが、どうも状況をうかがいますと、そのように思えますので、こうして急いでうかがったわけですが」

「はあ」

「その上、なんですか、昨日はわざわざ名古屋までお出かけ下さったとか」
「はあ」
「お忙しい中を、御迷惑をおかけして本当に申訳ございません」
岩渕の話の仕方には、一点の遺漏もない。だが岩渕が真先にいわなければならないことを、まだ聞かされていないのが気にかかった。それは、
「で、家内は無事なんでしょうか。どこにも異常はなかったのでしょうか」
というひと言である。
寿三は吉倉という老婦人に、桐子に特に肉体的な異常はなかったと伝えているはずである。だから、息をはずませて問い訳す必要はないかも知れない。しかし、病んでいるのが精神であっても病気には違いない。場合によっては、肉体の病いよりも長びくだろうし、ある意味では根が深い。自分なら、なによりも先にそのことを聞く。武部はそう思った。
〝この岩渕という男は、本当に妻の身を案じているのだろうか〟
そんな気持にさせられた。
〝だったら、なにも、こちらから教えてやることはない〟
意固地になるわけではないが、武部はそう考えてしまった。
「実は私も驚いているのです。これまでに、そんなことになる気配は全くなかったものですから」
岩渕は誰に聞かすでもないいい方をした。
「それは驚かれただろうと思いますよ」
寿三がいった。武部が答えないでいるので、受けてやらなければ話のつぎ穂がなくなるからといわんばかりだった。さすがに、商売人なのだ。
「で、どうしておりましょうか」

聞きながら、顔を武部に向けた。
「さあ……」
武部はそこで言葉を切った。そして、次にどういったものかを考えた。
「私にもわからないのです」
少々残酷ないい方になるかとも思ったが、ほかに適当にぼかす表現もない。
「なにしろ、先生から新しい御指示があるまでは、私たちにも病院に行くのを遠慮した方が良いという話なのですから」
いい終えた途端に、むかむかするものを感じた。
岩渕に腹を立てたのは他でもない。
秋乃の名が一度も出て来ないことなのである。初めての日に秋乃に会っていなかったら、桐子の問題は自分の手に余るものだったに違いない。泊める場所も寛がせる場所もないのだから、つまるところ、市なり警察なりの力を借りることになる。それらの機関も出来る限りのことはしてくれただろうが、人間的なぬくもりの点で、秋乃に追いつくわけがない。
症状の専門的なことはわからないが、平泉寺に現われた時の異様さが、更につのったかも知れなかった。それを、とに角、現在の穏やかさに止めておくことが出来たのは、秋乃と桐子の間に強い信頼が芽生えたからである。寿三から大よその様子を聞いて来たものなら、秋乃の名が一度くらい出て来なければならない。
仮に自分が岩渕の立場なら、玄関で挨拶をすませて、先ず秋乃のところに連れて行ってくれというだろう。そう考えると、一応、形だけは整えるという範囲から、岩渕が一歩も出ていないような気がする。
「私にお礼をいって頂くのも結構ですが、真先に訪ねて行かなければならない方があるんじゃない

ですか」
よほど、そういってやろうかと武部は考えた。
「恐れ入りますが」
岩渕がいった。
「はあ」
「病院の方に、武部さんから連絡を入れて頂くわけには行きませんでしょうか」
なるほど、そういうことかと武部は考えた。入院している桐子に会うことが先決だと、自分の側のことばかりを、この男は見ているに違いない。
「私の顔を見たら、思い出せないことがいっぺんに戻って来る……まあ、そんな上手い具合には行かないかも知れませんが、案外糸口がほぐれて来たりはしないかと思ったりもするのです」
いうことはきちんと体裁をなしているし、病人の家族がそう考えるのもよくわかった。だが、一番大事なことに眼配りが効いていない。桐子の場合は、腫瘍や打撲が原因ではなく、自分をとり巻いているものから逃げ出したかったという要素が強い。そこへ、直接の原因になった可能性もある人間を連れて行く。それがどんな結果につながるのか。病状を悪化させることもあり得る。
武部は困った。岩渕にはかなり厳しい見方で接してはいるが、さすがに、
「あなたが桐子さんを病気に追いやったことは考えないのですか」
とはいえない。
「私一存では、なんとも」
武部は逃げた。
「病院の先生の御判断次第……でしょうか」
「それもありますが、病院を選んで、主治医の先生に頼んで下さったのは、私ではありませんか

ら」
「ああ、芳沢さんといわれる方のことですね。申し遅れましたが、武部さんにお会いして、お礼を申し上げたあとで、病院に行く途中にでも、寄らせて頂こうかと考えておりました」
この言訳にはますます腹が立った。
「私より先にあちら様に……それが順序だと思いますが」
矢張りいわずにはいられなかった。岩渕の顔がゆがんだ。さっきからの会話が一向に嚙み合わないのは、そのせいだったのかと納得も行ったようだった。
「これは」
寿三が口をはさんだ。
「私が気のつかないことでございました。私が先に芳沢さんのところへ御案内せんといかんところでした」
寿三らしい気のつかい方だった。
「私からも武部さんにお詫び申し上げます」
寿三は頭を下げた。
「いえ、社長さんには、そんな。……私が武部さんのお宅へ連れて行って下さるようにお願いしたのですから」
岩渕にも、初めて、自分の配慮の足らなかったところがわかったようだった。
「家内を見つけて下さったのが武部さんだということでしたので……」
岩渕は詫びた。そういわれれば、桐子が現われたところを見たいという気持もわからないではない。
事情を理解して貰えればそれで良いのだからと、武部は意固地になった自分をたしなめる気持に

なった。桐子の夫がとるものもとりあえずにかけつけてくれたと聞けば、秋乃は自分のことのように喜ぶに違いない。

とも角、岩渕を秋乃のところへ連れて行き、桐子が平泉寺に姿を現わしてから、どんな大事な扱い方をされていたのかを見せてやろう。武部が考えて、

「では」

といいかけると、電話が鳴った。

「失礼いたします」

武部は言葉を残して台所へ立った。

「もしもし」

呼んでいるのは西出の声だった。

「そちらに寿三がうかがってますでしょうか」

「はい、いま見えておられますが」

「では、桐子さんの御主人だという方も」

「はい、御一緒です。お呼びしましょうか」

「いや、それは要らんがですが」

西出は口ごもった。

「では、お伝えすることでも」

「いや、どうも、訳のわからんことになりまして」

西出は困り果てているようだった。

「その……」

そういって西出は声をひそめた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com